

ナサニエル・ホーソンの研究 (その5)

—The New Adam and Eve を中心に—

江 草 清 子

(教育学部, 英語科)

A Study on N. Hawthorne (No. 5)

— The New Adam and Eve —

Kiyoko EGUSA

はじめに:

The New Adam and Eve は始め *The Democratic Review* 誌の1843年2月号に掲載されたが、後 *Mosses from an Old Manse* に収められて23篇が初版として1846年出版された。1854年には再編集して26篇の短篇とスケッチが出版され、この中4篇はホーソンの *The Old Manse* 時代以前の作品であって、他はすべて1842年7月9日より1845年10月2日迄居住した *Concord* の *The Old Manse* に於て執筆されたものである⁽¹⁾。

筆者はこれ迄の小論に於ても、ホーソンの作品に現われている人間観、人生観等に関してその思想的、哲学的傾向を追求しようと試みてきたが、小論においても、この短篇執筆当時のホーソンの *The Old Manse* 生活がいかに *Paradise* における Adam と Eve さながらの至福に満ちたものであったかを、主として彼の *The American Notebooks* と McDonald の *Hawthorne at the Old Manse* に依りながらみてゆき、且つこの短篇の主人公 *New Adam* と *Eve* が社会のもろもろの文化遺産に対して示す反応を聖書的な立場から考察してみようと試みるものである。*The American Notebooks* はホーソンの折々の日記や作品の材料となるべきものや思い付きが記入されているものであるし、McDonald のものは当時ホーソンの出版者であった *Everet Duyckinck* にあてた未発表の手紙と、これも妻 *Sophia* の未発表のほう大な当時の手紙に基礎をおく *Old Manse* 時代のホーソンに関する McDonald の学位論文である。

1. *The Old Manse* とホーソン

ホーソンは、1839年4月婚約したといわれるので、(1838年との噂もあるが)3年余ヶ月の婚約期間の後1842年7月9日 *Boston, West St.* にあった *Peabody* 家で *Sophia Amelia Peabody* と結婚式を挙げ、式後直ちに二人は *Concord* の *The Old Manse* に移り住んだ。*The Old Manse* は元来 *Emerson* の祖父 *Rev. William Emerson* が1769年に建てた牧師館であって、彼の死後その未亡人と結婚した *Rev. Ezra Ripley* が60年余りそこに住み、彼の死後空家となっていたのをその息子 *Samuel Ripley* から *Elizabeth Hoar* の口添えでホーソンが無償で借り受けてあったものである。*The Old Manse* の名はその後ホーソンが命名したものだといわれている。コンコードはボストンから20マイル程のところにある当時いわばこの時代の思想、文学の中心地ともいうべき

(1) J. J. McDonald: *Hawthorne at the Old Manse* (University microfilms, Ann Arbor, Michigan)

所で、同時に美しい自然に囲まれた静かな場所で、森あり、川あり、独立戦争当時の由緒ある古戦場ありして、散歩を好んだホーソンは日常に事欠くことはなく、且つエマソン、チャニング、ソロ、フーラーを始めとして当時代表的な文化人達が住んでいて、親しみ深い交友がかわされ、当時のニュー、イングランドの代表的な文化村落と考えてよかろう。枝を張ったにれの木と簡素な白い家、豊かな夏と、重厚な冬、又町はずれの色々の植物の原野や森林、果樹園など、そういう中での彼等の住居「牧師館」に付てや、彼の素朴な仕事や、交友、娯楽については、1846年 *Mosses from an Old Manse* を出版するに当って、その巻頭の序としてのせるべく1846年4月15日に書きあげた“*The Old Manse*”というエッセイ——副題は *The Author Makes the Reader Acquainted with His Abode*——の中でホーソンならではの麗文で照介している。

さてこゝでの生活がどんなものであったかをみてゆかねばならないわけだが、ホーソンの *Notebooks* への記入は作品のための多くのメモを記した1842年6月1日(水)以後はしばらく朴絶えていて、その後1842年8月5日(金)、即ち新婚生活1ヶ月足らずの折、妻の Sophia にペンをとって書斎に入り書くようにと厳しく命じられて久方振りに *Notebooks* に次のように記入している。

“...what is there to write about at all? Happiness has no succession of events; because it is a part of eternity; and we have been living in eternity, ever since we came to this old Manse.”⁽⁴⁾

感受性に富み且つすぐれた人物であったホーソンが晩婚で得た幸福の中でいかにも至福の思いにひたっていたことがうかゞえる。4ヶ年近い婚約期間の後、ようやくふみ切った晩婚のホーソンが、ブルック・ファームで結婚の為の資金を失い経済的裏付けはなかったとはいえ、どんなに喜びと霊の平安にみちた新婚時代であったかは読者には想像できるであろう。1849年8月5日(金)からはじまる *The Old Manse* 時代の *The American Notebooks* の記入は特にはじめの2ヶ年位のものには現代の凡ゆる文化文明に毒されない人間の原点としての感覚で事物を観察し、思索し、喜びを表現しているさまがみられる。自分達二人を直接アダムとイヴと呼び、*The Old Manse* をパラダイス、或はエデンになぞらえている例は後で示すとしても、エデンの園で土を耕すことがアダムの仕事であったようにホーソン自身も鋤をもって畠仕事にいそしみ、日毎に野菜の成長するさまを実に愛情深い優しい観察で美しく述べている。特に豆がかすかに小さな実を葉の蔭にはじらい気に見せ、翌朝にははやくも自立つ程に大きくなっているのを見て、生命の不思議さに感動し、又それをイヴの食卓に捧げられる日を楽しみ待つ記事をよむ時、ホーソンの感受性、霊の水々しさに筆者は驚きを感じざるを得ない。同年8月24日の日記では早朝に起き出て川へ魚つりにゆく、とった魚と畠の野菜で朝食を摂ったことが記してあるが日記の終りにホーソンらしく次のように記している。

“...so that this day's food comes directly and entirely from beneficent nature, without the intervention of any third person between her and us.”⁽⁵⁾

“her”は勿論 Nature のことであり、又果樹園の桃のみり、リンゴの豊かすぎる程のみりについての描写の中でも絶えず之を植えた先住者や神への感謝の言葉がみられる。一貫してこの時期のホーソンの心境は極めて素朴で幸福に充ちあふれ丁度マタイ伝5章のいわゆる山上の垂訓といわれる部分の3節或は8節にあたる心境がしのばれる。即ち「こゝろの貧しい人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである。」又「心の清い人たちは、さいわいである。彼らは神を見るであろう。」というのがそれである。「こゝろの貧しい」という意味はごう慢でない謙虚に物事に感謝できる心という意味であろう。又日記によれば Emerson をはじめ Margaret Fuller, Elizabeth Hoar

(4) Hawthorne: *The American Notebooks*, Centenary Edition VIII, (Ohio State University Press) p. 315

(5) 同上書 p. 346.

Thoreau, Ellery Channing 等がホーソンのいわゆる牧師館への「御光のさしている木蔭の小径」を通してアダムとイヴの神聖な領域を度々犯しているが、総じて Emerson のことは当時コンコードの哲人としてあれだけの名声を得ていた人に対する評価を日記の中では示していない。むしろ1842年10月10日(月)の日記の中で9月27日, 28日の両日 Emerson と共に徒歩旅行をして Shaker village というところへゆき、そこで Emerson は或る人達と神学論をやっているが、余程ホーソンにとっては記憶したくない事であったろうか memory から去ったと次のように記している。

“...the particulars of it have faded from my memory; and all the other adventures of the tour have now so lost their freshness that I cannot adequately recall them. Wherefore let them rest untold.”⁽⁶⁾

上述にもみられるようにホーソンはエマソンの事については余りふれたがらず、良い評価のあとがみられない代りに、Thoreau との交友については面白い日記がしばしばみられる。例えば同年9月2日の日記では洪水の為 Thoreau がボートでホーソンを訪ねてくるが、之は彼がインデアンがカヌーを漕ぐのをみていて覚えたというもので、そのうちホーソンもこの漕法を真似して練習してするのである。或は又年が明けて1843年4月25日の日記では Thoreau からカラスの鳴き声でその種類の識別を教わったりしている。その他 Thoreau のことについては心に遠慮なく面白く *Notebooks* に記入されているのが感じられる。

さてこゝいらで自分達をアダムとイヴにみたてた個所をひらってみよう。

“Like Enock, we seem to have been translated to the other state of being, without having passed through death. Our spirits must have flitted away, unconsciously, in the deep and quiet rapture of some long embrace; and we can only perceive that we have cast off our mortal part, by the more real and earnest life of our spirits.”⁽⁷⁾

文中の Enock というのは新約聖書ヘブル人への手紙11章5節が示すように、昔信仰によって肉体の死を経験せずして生きたまゝ天国に引きあげられた者である。そのエノックのように彼等も肉体の死を経験せずしてその霊は天国に昇り、そこで人間のより本質的で最も真摯な霊の働きを体験するというのであるから、この日の日記は読者をして清らかな微笑を以て心からの祝福を送らずにいらぬものがある。僅か3ページ足らずのこの日の日記で特に目立って注目をひく言葉をひろってみる⁽⁸⁾。カッコ内の数字はその頻度数を表すものである。

Paradise (5) Happiness (3) Providence (3) sunshine (2) Adam and Eve (2)
eternity (2) Heaven (2) blissful (1) sarced (1) angelic (1) celestial (1)
ethereal (1) hallowed (1) unspotted innocence (1) nectar and ambroisa (1)
the music of spheres (1)

以上をみても僅か3ページ足らずのその日の日記がなんと多くの天国の生活と関わりのある言葉でみちていることか。これをみてもホーソンが自分とソフィアをアダムとイヴにみたて住居も食物も一切を含めてまるで天国にみたてゝ暮っていた如くである。

続いて8月6日, 7日, 8日, 9日等の日記には Concord river のこと the Old Manse の部屋の模様替え或は果樹園等のことについて記されているが、自分達の生活をパラダイスのアダムとイヴにみたてた感じのものにしぼってみると8月10日の日記が興味深い。それは次の様な記事で始まっている。

“The natural taste of man for the original Adams' occupation is fast developing itself in

(6) Hawthorne: *The American Notebooks*, Centenary Edition VIII (Ohio State University Press) p. 362

(7) 同上書 p. 315

(8) 同上書 pp. 315~317

me. ⁽⁹⁾

ホーソンが畠に興味を持ちその手入れ仕事をはじめ、豆などが日毎に成長するのを驚異と希望をもって毎朝楽しんで眺め、収穫の日を期待して待っているさまがつづいて記されている。そして“*I suppose Adam felt it in Paradise*,”⁽¹⁰⁾ といって自分をどこまでも人間の原点としてのアダムにみため、自分が今畠仕事をしてその収穫によって家族を支える喜びと同様の思いをアダムもパラダイズで感じたことだろうと彼は想像するのである。極めて素朴な感情とよろこびの表現であるといわざるをえない。又同年8月13日(土)の日記では次のように述べられている。

“It is as if the original relation between Man and Nature were restored in my case, …— to trust to her for food and clothing, and all things needful, with the full assurance that she would not fail me.”⁽¹¹⁾

上記表現も又実に聖書的である。即ちマタイによる福音書6章26節から最後の34節に至る迄の箇所はすべてこれ原罪以前の人間アダムと神との間の本来の関係を示すものであって、人間は何を食べよう、何を着ようと思わずらわなくてもたゞ神への全き信頼さへあれば必要なものはすべて添えて与えられるという旧新約両聖書を通して一貫している人間の神への信頼とその信頼に応え給う神の人間への約束を表す神と人間との最も根本的な関係である。又同じ日付の日記で、Concordに來て以来非常に元気でまるで少年のように潑らつとした日々を過している事、普通結婚は何かと浮世の苦勞をもたらすものだと言われるのに、自分はそうしたこの世の一切の苦勞をすて去って墮落以前のアダムが神を信頼して生活したように生活していると述べている。

“…but I seem to have cast off all care, and live on with as much easy trust in Providence, as Adam could passibly have felt, before he had learned that there was a world beyond his Paradise.”⁽¹²⁾

このように the Old Manse に於けるホーソンの新婚生活を日記によってみてゆくと一見諧謔気味に書かれている如くにみられ易いこうした表現の底流に実に根強いバックボーンとして最も根本的なキリスト教の精神が流れていることを筆者は感ずるものである。先きにも述べたように経済的には何らの基盤はなかったのも、或るクリスマスは何んの御馳走もなく、パンとコーヒーで凌いだ時もあったが、しかし Sophia は幸福であることを母に書き送っている。McDonald はその *Hawthorne at the Old Manse* の中で

“… he wrote virtually no imaginative literature based on historical subject matter, the vein that had earlier produced his richest ore. Instead, he sought to “transmogrify” his experience of contemporaneous actuality, fusing that experience with his “ideal” fictional world.”⁽¹³⁾

“…From the study emerges a picture of Hawthorne as a progressively more self-critical writer beginning to be deeply concerned with the aesthetic nature of the stories he is producing.”⁽¹⁴⁾

“…Instead they deal thematically, through a more or less allegorical medium, with the central aesthetic problem which had produced the sketches from a private journal and the

(9) Hawthorne: *The American Notebooks*, Centenary Edition VIII (Ohio State University Press) p. 328

(10) 同上書 p. 329.

(11) 同上書 p. 332.

(12) 同上書 p. 331.

(13) 同上書 iii

(14) 同上書 v

“blasted allegories.”

以上にみられるように The Old Manse 時代のホーソンはこれ迄の彼の作品の特色であった歴史に基礎をおくものから離れて殆んど思索的な知性の高いものであり、又美意識、倫理感覚の高いものが渾然一体となって円熟したすぐれた作品を産んだと思われる。McDonald は次のような The Old Manse 時代のホーソンの作品一覧表を示している。

Table: The Old Manse Period Canon⁽¹⁵⁾

Title	Place and Date of First Publication	Date Begun	Date Finished
The Old Apple Dealer	<i>Sargent's</i> , Jan., 1843	October 11, 1842	October 21, 1842
The Antique Ring	<i>Sargent's</i> , Feb.	November 1	November 15
The Hall of Fantasy	<i>Pioneer</i> , Feb.	November 16	December 17
The New Adam and Eve	<i>Democratic</i> , Feb.	December 18	January 12, 1843
The Birthmark	<i>Pioneer</i> , March	January 13, 1843	February 1
Egotism, or The Bosom Serpent	<i>Democratic</i> , March	February 2	February 15
The Procession of Life	<i>Democratic</i> , April	February 16	February 28
The Celestial Railroad	<i>Democratic</i> , May	March 1	March 20
Little Daffydowndilly	<i>Boy's & Girl's</i> July	March 24	April 24
Buds and Bird Voices	<i>Democratic</i> , June	April 28	May 5

(執筆が4月から11月迄とんでいて外気の暖い間は執筆が殆んどない現象がみられるが、これは Notebooks にもみられるようにホーソンが陽光を愛し夏の間は出来る丈戸外の生活を楽しんで、Notebooks への記入以外は殆んど執筆のための筆をとらなかつたのを示すものである。) (筆者注)

Fire Worship	<i>Democratic</i> , December	November 1	November 15
The Christmas Banquet	<i>Democratic</i> , Jan., 1844	November 16	December 12
A Good Man's Miracle	<i>Child's Friend</i> , Feb.	December 13	December 21
Earth's Holocaust	<i>Graham's</i> , March	December 22	January 9, 1844
The Intelligence Office	<i>Democratic</i> , March 1844	Jan. 10, 1844	Feb. 15, 1844
Drowne's Wooden Image	<i>Godey's</i> , July	Feb. 16	March 11
The Artist of the Beautiful	<i>Democratic</i> , June	March 12	May 3
A Select Party	<i>Democratic</i> , July	May 4	June 15

(この間も再び執筆がみられないのは上述の場合と同様の理由であることは McDonald が明らかにしている)

A Book of Autographs	<i>Democratic</i> , Nov.	Sept.	Oct. 15
Rappaccini's Daughter	<i>Democratic</i> , Dec.	Oct. 16	Nov. 13
<i>Journal of an African Cruiser</i>	June 20, 1845	Jan. 1, 1845	March 1, 1845
P's Correspondence	<i>Democratic</i> , April, 1845	March 2	March 12
The Old Manse	<i>Mosses</i> , June 5, 1846	May 1, 1845	April 15, 1846

上述の The Old Manse 時代の作品表は MacDonald が当時のホーソンの出版者であった Everet Duyckinck との間に交された未発表の書簡や又極めて筆まめであった夫人 Sophia の膨大な未発表書かん、その他の資料に基づいたもので1971年8月 Princeton 大学に提出された彼の学位論文の中のものである。この表を観察して発見される事は既版の The Twice-Told Tales が3分の1近く歴史に基づくものであるにも拘らず The Old Manse 時代の作品には彼の特色の一つであるそうした歴史性のあるものが見い出せない。反って彼の今一つの特色であり且つ、それ故に彼をア

(15) J. J. McDonald: *Hawthorne at the Old Manse* (University microfilms, Ann Arbor, Michigan) p. 265

メロカ文学に於ける第一人者に置くことの出来る深淵にして普遍性あり、且つ高き知性に溢れる美的、倫理的作品が誕生しているのが発見される。この時代における一連のこうした作品誕生の原因は *The Old Manse* に於けるホーソンの生活と無縁と考えることは出来ない。いなむしろ既に述べたように現代文明に毒されない原点的な人間の立場に立って思索し、哲学し、恵まれぬ経済事情の中であって、海、山からの自然の産物に心からの感謝を感じずる至福の心境にあってはじめてこれらのつきせぬ深みのある作品が生れたのであろうと考えられる。さて幸福のさ中に置けるアダム・ホーソンは12月18日から翌1843年1月12日迄に *The New Adam and Eve* を書きあげている。これは一般に彼の作品分類では社会批評に入れられているものであるが、彼が果して社会批評といった意識をもっていたかどうか筆者は疑うものである。

2. The New Adam and Eve

既にのべたようにこの作品は1843年2月号の *The Democratic Review* 誌に掲載されたものであるが、この作品の種とも思われるものが1836年10月25日の日付で *The American Notebooks* に次のように書き込まれている。

“The race of mankind to be swept away, leaving all their cities and works. Then another human pair to be placed in the world with native intelligence like Adam and Eve, but knowing nothing of their predecessors or of their own nature and destiny. They, perhaps, to be described as working out this knowledge by their sympathy with what they saw, and by their own feeling.”⁽¹⁶⁾

1836年といえばホーソンは未だ30才であったが、その時に考えたこのヒントはやがて6年余を経て *The New Adam and Eve* となって現われたわけである。もしこのヒントを得た時点に於て彼が *The New Adam and Eve* を書いたと仮定すると、あの陽光のような柔かい暖かさの中での鋭い徹底した現代社会に対する反応を示したかどうか。やはり *Sophia* との長かった婚約時代を経て *The Old Manse* の新婚時代があってこそ生れることの出来た作品であると筆者は考える。

1846年の *The Mosses from the Old Manse* の初版の23篇の短篇の中4篇は *The Old Manse* 居住以前に書かれたものである。それらは *Roger Malvin's Burial* (1832年)、*Young Goodman Brown* (1835)、*Mrs. Bullfrog* (1837)、*Monsieur du Miroir* (1837) であって、何れも彼の傑作であるのみならず、心理的な又深い霊の世界の扱われているものがこの *The Mosses* につけ加えられているという事はこの短篇集が *Twice-Told Tales* とも又異った一つの特色を表わそうとした著作の意図が感じられる。

さて1836年10月25日のヒントはやがてその形を殆んどとめて、次のような形となって現われる。即ち人類が、或る日突然いつこかへ消え去った次の日の暁、ボストンの町へ、しかも生物は一切消え去り、たゞ前住者の残した物質文明の遺産ばかりがそのまま残されたところへ——新しい *Adam* と新しい *Eve* とが突如いづこからともなく現われたという場面が設定されるのである。彼等は完全に発達した知性と精神を持っているけれ共、先住者やそれに付随した環境に付ては何らの知識も先入観も持っていない。蛇の誘惑によって墮落する以前の純真素朴な魂をもった *Adam* と *Eve* と考えてよかろう。したがって本能と直観力で即座に真なるものを直観するが、ゆがめられた人工的なものには絶えず理解に苦しみ当惑させられるのである。作品中では“art”と“nature”という語によって使いわけ、“art”はいかにすぐれたものであっても人工的なものであり、一方“nature”は神の作り給うたものというわけであろう。そして彼らにはこの *Nature* の“wisdom and

(16) Hawthorne: *The American Notebooks*, Centenary Edition VIII (Ohio State University Press) p. 315

simplicity”が直観的にすぐ他の人工的なものと区別して識別されるのであるが、この“wisdom”及び“simplicity”という語もホーソンが好んで使う極めて意味深い語である。人間の手になる art に対する考え方としてホーソンは、この同じ *The Mosses* の短篇集の中の *The Artist of the Beautiful* の中でも “In Heaven, all ordinary thought is higher and more melodious than Milton’s song.”⁽¹⁷⁾ といっている。ホーソンの芸術論は中々にきびしいものがある。

さて地上に現われた新しい Adam と Eve は互いの存在に気付いた瞬間別に驚きを感じないどころか “Each is satisfied to be, because the other exists likewise; and their first consciousness is of calm and mutual enjoyment.”⁽¹⁸⁾ と感じるのである。之は新婚当時のホーソン自身の感情が述べられたものでもあろうし、又それは Eve は Adam のアバラ骨の一部から創られたものであるという創世紀の記事の通り、内的な魂の世界では二人は一体であるからであろうか。それよりも二人はまず自分達のいる場所に不安を感じる。街灯柱やレンガ造りの家々が意味する人造の組織——つまり文明——とはいったい何んであろうか。長く並んだ建物の列、それにはさまれた狭い通り、荒れ果てた歩道、森では孤独は生であり、都市では死である。森では人間がいなくても絶えず息づいているのに都市では人間がいなくてはそれは死である。そんな荒涼とした道を不安で元気がなく Eve は歩きはじめる。そして石の歩道の間には芽生えはじめたばかりの雑草をフト見付け、はじめて心が引かれるのである。 “...she eagerly grasps it, and is sensible that this little herb awakens some response within her heart.”⁽¹⁹⁾ 人工のものには何ら心は動かぬ一方、さゝやかな雑草の芽生にも Eve の心の中に共鳴をするものがあるわけである。又 Adam も同様眼にうつるもの何一つ理解出来ず、困惑を覚えるが、目を上げて空と雲をみた時はじめて、魂にふれるものを感じるのである。そして Eve に次のようにいう。 “Look up yonder, mine own Eve, ...surely we ought to dwell among those gold-tinged clouds or in the blue depths beyond them. ... but evidently we have strayed away from our home; for I see nothing hereabouts that seems to belong to us.”

こゝで用いられている空という意味は勿論ホーソンの好む象徴的表現であって物質のこの世に对照する魂のふるさと即ち天国を意味するものであろう。

さて二人は自分達に不安と困惑のみを与えるこんな世界から抜け出し度いという気持からポストンの町を歩きはじめるのであるが、道すがら、次々と立ち並んでいる建物に立ち寄り、そこに見出すものに二人が各々の反応を示してゆくのを作者は追っている。さて二人がどのような反応を示してゆくか、又それを聖書的立場からみるならばどのように関わるかを試み度いと思う。

3. 二人が示す反応

(1) 呉服物店にて

Adam

品物に何んらの関心を示さず、軽蔑した口調で手にした品物をなげすめる。どんな美しい服よりも Eve の方が美しいと思い、Eve の美によって衣服が引き立つといふ、着物が着る人を美しくすると考える現代の我々の観念の主体性の誤りをついている。

Eve

Adam よりはいく分興味を持って美しい布にふれてまわる。興味は持つが結局は本当に好きに

(17) Hawthorne: *The Complett Novells and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne* p. 1151

(18) J. Suzuki: *The Light and The Dark from Mosses by Nathaniel Hawthorne* (北星堂) p. 3

(19) 同上 書 p. 5

はなれない。

こゝでは男性と女性という相異から二人が美しい衣裳へ示す反応には多少の違いはみられるけれども、根本的には二人の本能的、直観的感覚はきわめて聖書的である。即ちマタイ伝6章29節にみられる「栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。」という聖句にもみられるようにどんな美しい衣裳よりも、無垢で素朴な Eve の美しさにまさるものはなかったのである。

(2) 教会を訪れて

Adam と Eve がすでにあこがれを表明している高い空に向ってそびえている尖頭へ引かれて彼等は教会へと行く。寺男が最後に締めたのだろう時計がこの二人の人類の子孫に話しかけるが、彼等にはわからない。即ち時間は人間の考え出したものであって有限なこの世のことを語るものである。無限の世界からやってきた彼等にはわからないのは無理もない。“Yet some odor of religion is still lingering here…”⁽²⁰⁾ と作者はいうけれども Adam は “Eve, something impels me to look upward,” — “but it troubles me to see this roof between us and the sky. Let us go forth and perhaps we shall discern a Great Face looking down upon us.” という。文中の “sky” は例によって神或は魂の世界を象徴する言葉とすれば、“this roof” は教会の建物内至それに内包される教会人、教会制度といったものを指すと考えてよからう。ホーソンは新婚間もなくの1842年8月30日の日記で次のように述べている。“I find that my respect for clerical people, as such, and my faith in the utility of their office, decreases daily. We certainly do need a new revelation — a new system — for there seems to be no life in the old one.”⁽²¹⁾

つまり、この日記では伝統的な教会の在り方を明らかに批判している。教会というものが真に人間が神を礼拝する為にあるのではなく、教会という建物や制度が存在する為、それが神と人間との間の障害となって、まことの礼拝のさまたげとなるならば、むしろそれはない方がましであるということはこの作品中では暗示している。聖書には二人、三人よりて心より礼拝するところに神は存在すると記されているのであって、したがって Adam と Eve は教会を出るとその戸口のところで父なる神に向って極く自然な本能的な魂の動きに導かれて、そこにひざまずいて祈りを捧げるのである。ホーソン自身1842年9月4日、日曜日の *Notebooks* の中で「妻は教会へ行ったが自分は行かない。聖日は好きだが、伝統的な方法で守り度くない」と述べている。極めて純粋で真実なるものをみつめていた彼としては、当時の教会そのものに人為的な不満、不純を感じていたことであろう。

(3) 裁判所を訪れて

この建物が何のためのものか勿論彼等にはわからない。心の清らかさや素朴さを欠いた人間が、いわゆる「罪を犯した人」というのを裁くなんて、又本来人間は愛から出たものであるのに人を罰するための法律があるなんて、又刑務所のこと、更には絞首台のこと等、人類の典型的なこの組織について、この二人には理解出来よう筈はなく、たゞその雰囲気丈でも心がふさぐ、Adam は恐怖にふるえ、Eve は “... my heart is sick! There seems to be no more sky — no more sunshine!”⁽²²⁾ と叫ぶ。この理解しがたいという事実を通して作者は明らかに Puritanism の社会を批判し、又 prison 制度にまちがいのある事が指摘されているようにみえる。又 New Adam と Eve にとってはいかに立派な人間といえども人間が人間をさばくという事について到底理解出来ないという事の

(20) *The Light and The Dark from Mosses* by Nathaniel Hawthorne (北星堂) p. 11

(21) Hawthorne: *The American Notebooks*, Centenary Edition VIII p. 352

(22) *The Light and The Dark from Mosses* by Nathaniel Hawthorne (北星堂), p. 13.

根底にはやはり聖書があると筆者はみるのである。即ち姦淫を犯した女を石を持って追ってきた大勢の人々に対して、イエスは静かに、しかし威権ある態度で誰でも自分は全く罪なき者と思う者が、この女に石をなげよと仰せられた。すると一人去り二人去りして遂に誰もいなくなってしまった。という話が聖書にあるのである。又最も偉大なる使徒パウロは、私こそ罪人のかしらであるといっているが、聖書に流れるこうした根本的な罪に対する考え方がホーソンをして裁判所や刑務所、絞首台等に対してこのような *ironical* な感慨を述べさせたのではないかと筆者は考察する次第である。

(4) 大邸宅を訪れて

個人の大邸宅であって、調度といふ、絵画といふ、すべて最高のぜいを尽している。しかし彼等の心に訴えるものは何もない。高価な絵画にも何か偽まんのものを感じとられる。また鏡を初めてみて驚くが、同時に同じ場所に同じ物が二人いることに多に疑問をもつ。又 Eve は Adam は二人はいらない、一人で満足だと思ふ。意味深い言葉である。次に塑像をみつけるが、これ迄 *two dimension* のものは受け入れなかったが、*three dimension* には何か感じるものがあるらしく、特に子どもの像に対しては何かキリストの誕生のヒントを思わす言葉が Eve の口からでる。各部屋を廻る中に Adam と Eve は各々男性と女性の職能を示すかのように異った興味を示し、Eve は子供部屋の小物類に熱中したり、裁縫道具を指にはめてみたりする。

次の部屋はまさに華やかな晩さん会が開かれようとした瞬間に運命の日が訪れた事を思わすように、豪華を極めた御馳走や数種の香り高い洋酒が並べられている。しかし自然界からやってきた彼等はこのぜいを極めて味つけされた魚、鳥、肉の美味なることを観賞出来るであろうか。又高価な飲み物類についてもどうであろうか。未だこの世に毒されていないこの二人にとっては世のいわゆる “a fashionable party” で “the cultivated appetites” を満足さす筈のいかなる御馳走も、たゞ嫌悪を覚える丈であり、いさゝか空腹を覚えてきた二人はデザートとしての果物を食べてはじめて “食物” を食べたという気になる。又飲み物もシャンペンその他を口にした丈ではき出してしまふが、ようやく水のみつけて飲んだ時、乾きがいやされ、本当の飲み物をのんだ事を知るのである。作者はこゝでも又、現代人の食物に対する批判を大いにしている事が感じられる。限りなく増長をしてゆく人間の本能的感覚に対して、今日多くの者が “自然に帰れ”、又 “原点に帰れ” という事を叫んでいるが 150 年の昔、ホーソンは人間のごう慢、文明の行き過ぎについて既に大いに思考するところがあったことが察せられる。又摂理の神への反抗によって失った平和や喜びを束の間でも味うために、短い興奮状態に浸ろうと酒をのむわけだろうが、Adam は “... we must again try to discover what sort of a world this is, and why we have been sent hither.” という。すると Eve は勿論お互が愛し合うためにこの世にきたのですわというのが、Adam は更に続けて、たしかにそれにちがいないが、 “but still — I know not — something tells us there is labor to be done. Perhaps our allotted task is no other than to climb into the sky, which is much more beautiful than earth.”⁽²³⁾ という。こゝで作者ホーソンは Adam の口を借りて人間のこの世における究極の目的を述べていると思われる。例によって “sky” の象徴するものは “earth” 又は “world” と彼がいうところのものとは反対の世界である。こゝで Adam の述べている人間のこの世の目的は伝統的なキリスト教に於ける人間のこの世における目的と合致するものであると思われる。即ち信仰によって神の国に入る事である。この事に付いて詳述をする余地は今こゝにないがホーソンは現世のたゞ中における神の国の存在ということについて非常にはっきりとした考え方を他のいくつかの作品の中で述べている。

⁽²³⁾ *The Light and The Dark from Mosses by Nathaniel Hawthorne* (北星堂) p. 12

(5) 銀行と宝石店を訪れて

銀行に入り、お金をほうり上げて、そのキラキラ輝き落ちるのを楽しむけれ共、彼等にとってお金は何んの価値もなく、又なぜ、誰がこんなに沢山集めたのか理解に苦しむ。お金の価値について現代人のもう一度原点に帰って考えたい点である。

次に宝石店にゆくが最初は宝石の輝きに魅せられるが、花びんに生花がまだ活き活きと活けられてるのをみて、生きているこの花の方がずっと美しいと Eve はいう。そしてこれら生命あるものは私達同様この世では住みにくい事であろうというのである。

さて、この後貧富の差について、或は戦争に関し、学問、文学に関し、或は又死後の事に関して種々の見解が New Adam と Eve を通して述べられているけれども、それらに関しては次の研究報告で述べることにする。

参 考 書 目

- The Complete Novels and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne* (Modern Library)
The American Notebooks by N. Hawthorne (Centenary Edition VII, Ohio State Univ.)
The Light and The Dark from Mosses by N. Hawthorne (Hokuseido Press)
Hawthorne at the Old Manse by McDonald (Univ. Microfilms, Ann Arbor, Michigan)
聖書 (日本聖書協会)